

小精序雜載

四

大正十二年五月上浣起筆

特別
14
1919
352



A ledger page with a blue border and 15 vertical columns. The columns are of varying widths, with the first column on the left being the widest. There is a small blue tab on the left edge of the page.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

小精舎の雑載四

大正十二年 九月上院紀筆



○大隈展末之八五去後一週百日の播客やら夜
 伽やら大隈別邸に在りて、いろいろの人と
 談を交へて、セオリアムやメキ得るものも前巻
 に数十枚多の日記すを例として一巻に記す
 心ん心交に六巻を改めて出きつゝ、左の談
 を著りて官内友等し錫吟詩次印の色
 変らざる、此八主権友を奉職したる人也
 後を多く先帝の清ま生希性格に關す

れども、是はあるまじき事として聞き流すの外なし。
元來今の審査の目的は何れにあるかを詳にせねど、手腕の巧みを選ぶに偏するの傾向ありて、精神書を次にするかに思はる。試に大雅、蕪村の作品をば其の名を匿くして、今時の審査に掛けんか、必ず落第すべく、華山、竹田、介石、雲泉皆選に入るべしと思はれず。大雅の歿するや、麓底に堆積せる刺水殘山を賣りて七百金を得たりと言傳ふ。往時の七百人は大金と云はざるを得ず。然るに暫時に此巨額に換へ得たりとすれば、當時既に具眼の人も鮮からざりしを想像するに足る畫理の眞諦知るや知らずや。進取國を以て自ら任ずる我が邦の如きは、何時か之を知るの時に達すべきか、近來歐人も東洋畫には重きを置くもの如し。左すれば作者鑑者相待ちて呼應せば、國光發展の一助となるは言ふ迄もなし。

本誌贊助 春木南溪先生 山



らずの古知新は確言なり。今の鑑畫の方針を聞くに、舊を捨てて新に就き、温古には耳を假さざるの風あり。一壯士勇に誇る。一日野に出づ。老狸ありて路を遮り急ち一大怪僧に化す。壯士冷笑して曰く、古し。更に一眼童に化す。曰く、古し。一宮女に化す。曰く、倍々古し。忽ち見る、一塊金の落ちて目前にあるを、燦然光を放つ。壯士覺えず手を伸して之を拾はんとす。狸形を現はして曰く、「ドーダ新シカロー」今の新を語るもの、豈之に類せざる乎。

四書畫

商の奇行

専ら書畫を取扱ひたる者は甚だ稀れなり。都下の安西雲烟、足利の近藤樵香等は、純ら書畫のみを營業とし、然も相應に鑑識もありて、偶々鑑記の存任せるものを見るに、皆信を置くに足る。同時信州佐久郡に和作(姓不詳)と呼ぶ書畫商あり鑑識もありて、資性奇矯、言行往々人意の表に出て、談柄とするに足るものあり。和作多くは野州と越後とを來往し、其の華客とする家に至るや、必ず玄關の中央に立ちて、大聲に

元來繪畫は一時快を取るの物に非ずして、千歳不磨の特技に屬す。三越白木の流行織物とは自ら撰を異にす。今日の流行、明日の廢物とは、其の歸を同らせざるを悟らざるべか

鍋島と一橋の確執

一橋の事に就て、大隈伯が別な席で自分に談られた話がある。曰く「全体一橋家より將軍を出したと云ふ處から、向家が一時非常に跋扈を極めた時代があつて、紀州、屋敷、水戸の三家さへ持疎した事がある。處が或事件から其鼻を挫く事が

起つた。或年鍋嶋閑叟が江戸へ參勤の途次川崎へ宿つた、當時大藩の諸侯の宿へ宿る時には、高札を大きく建ててと埒を結び某侯の宿泊と標榜するが例である、然るに其日一橋の隠居が川崎大師參詣の歸途「鍋嶋肥前守殿云々」の高札を見て、目障りだから取捨せると云ふので、家來のものが宿役人に交渉したけれども承知せぬので、隠居は大に怒り、理不盡にも家來に之を取捨てさせ豪然として通過した。之が一場の問題となつた。斯くと聞くや閑叟は直ちに急使を江戸城に馳せ將軍家に迫り、之が解決を見れば參勤は致さねと云ひ出した、幕府も容易ならざる事とて、水戸侯などを以て調停せしめたけれど、閑叟いつかな聞かず、強硬の態度を以て、是非一橋の重臣を渡せ當方にて存分に成敗をするからと云つて堅く執つて動かぬ。さりとて一橋家にも重臣を鍋嶋家へ渡す事は体面上出来ないと云ふ譯で、一橋にて重臣を斬り漸く解決する事を得た。之より一橋も少しく跋扈をやめたので、三家初め諸侯も内心大に喜んだ。之は閑叟の若い時分の事であ

宮内省に漁獲の事あり物に陛下の御恩なると
り差許さる。或は外四の貴族或は高級武官
或は元元大臣を以て御許しありしこと何人
も御許し無りし。これに仔細あるは先帝
の皇族の專恣を終に帝家を亂るの基と深
く御省に憂あり、何事か就て皇族を抑くら
ぬ、皇族の故を以てつてアガレをいひて咄いせ
ると、又御省狩獵を御許し無かりしと云ふ
為めあり、又陛下が維新の御業を輔けたる故
を以ていつらも後唐の勢あるを秘して御忌
みありと云ふ。院に地味に入りたる佐命の薩長

先輩に忠勤あり、是れを以て抑むるべき他の
薩長出身者を以て後唐を以て御許し無かりしと云ふ
と不可と云ふ。由當りて波多野五子よ
りも支まうしことあり、御許し無かりしを
許さず。陛下の先天的に王者の御許しを有
せんと、誰の申上るもあらずも、大切の事と御省
身何人及ハテ御見渡ありと云ふに、陛下の
或人と稀なるも或は傷みの皇位陛下と馬
車に御回乗ありと云ふしことき世万々
まくの村度を下せしむ。御意を皇位に
臣下するハ帝者と同等なる可らず、是れ倫次

を乱すを乱階を生ずる所以なりと因ら之れを指し
し給ひ、憲法發布の時と重臣の物に請ふれば
まさる為り、田乗さへしのみならず、皇太后御
去の場へも一雨に於て飽まひ子禮を守
らん心禮を日恐れ多き迄おまへんことを言
一回の感激しなるならず、而して大葬の儀式を
向奉り列るよりしと陛下の深慮を以て儀を
日天子と天の降し給ふの和の子にあらざると云
ふ御見解あり、已むと儀式を以て信ずるべし
大葬の終るまで飽まひ御謹慎の心禮と子禮
を盡さん、大葬の終るまで飽まひ御謹慎の御
おれあり、陛下と政務に就て種々御意見

あり且の御記憶もよくありせらるる、御用
別ありしことも、政務奏上の時と急を以て
御下問あり、勅裁を形式一遍にあらせし時
と勅裁許しありせんこともあり、従つて群臣
の事務政務を奏上し勅許を仰ぐ場合を御
念入りの御意見を述べ奉る事なきことと
期し、陛下におかれ、口中府中の別を以
てえ、寧ろ、於て内外の區別と格と
御自ら之れを乱さざることあり、又他も
之れを乱すこと能はざらん、徳大寺の長く侍従
長なりし所以に、公平無私を奏上を取次
ぐ場合あり、御意見も、徳大

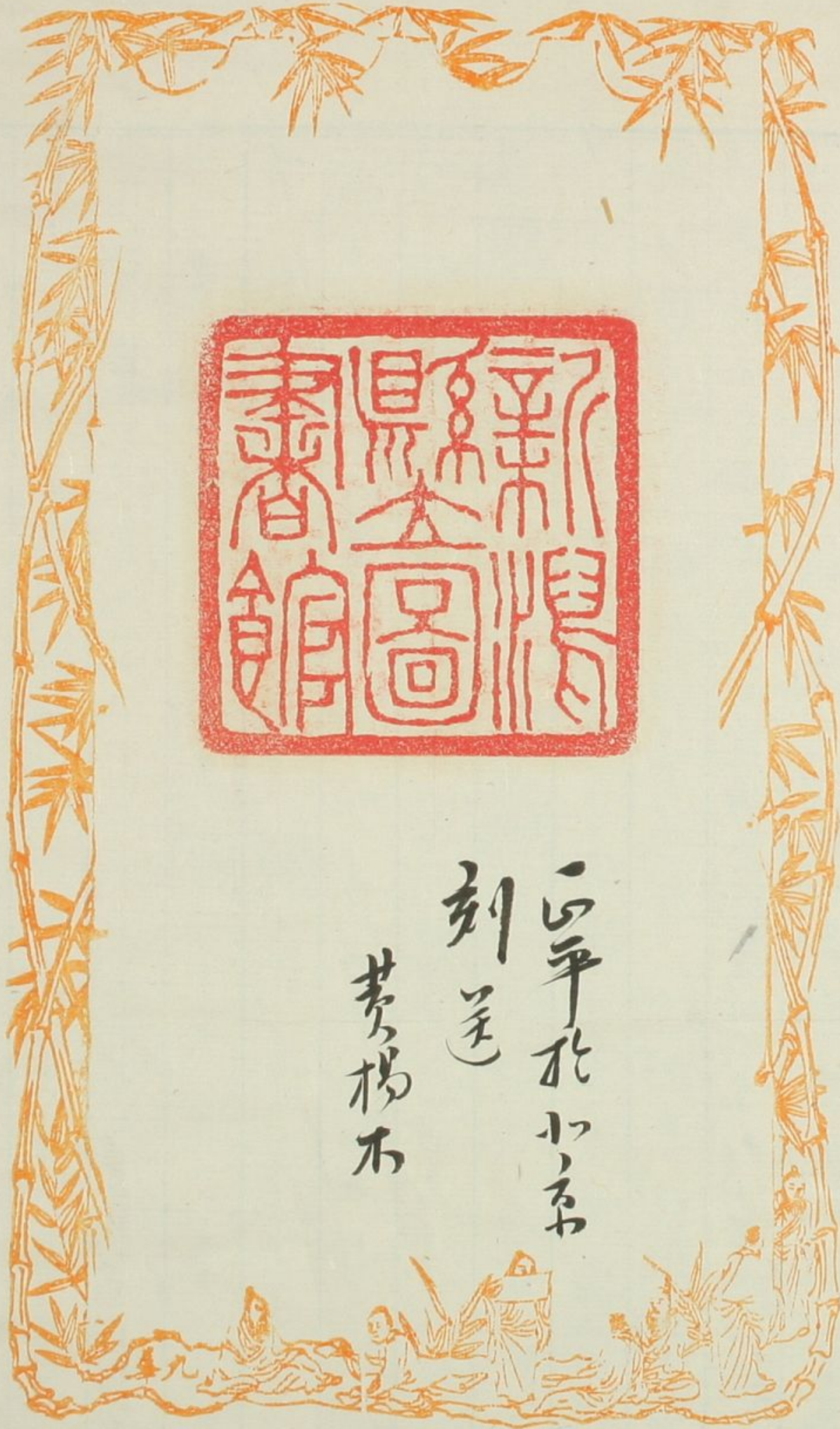
寺と生きは電流と皮肉を云ひしをどうするの
下をえんを嘉文てんどう、歴代名臣大匠の由りし
尤も難骨ううしと玉方向うう、震怒あつて
七非を飽まむ非をし、當りて枉けず、神不興
もか願又す云いんと、蛇も石をえんを飽まむ臣
節をえんをいとうと云、陛下の時、譯臣の言に
神不興と感てさせ給ふことあるも其故を以
て決して其の官職を奪いんことう、且つ神
震怒の雷雨のこことくも、収すんば、天氣朗晴
繩草も餘情を何せしと云、換ることこの
りしとくし、陛下の如く、四家の主たる
これより不勤、あつてもえんをえんをえんが
す

喜ひも又あつてえんをうし、詠嘆の戦、長官外
史が専ら戦況を奏上し、大木宮の御前
令卿も外の史跡あり、その最、初日本うま
戦艦をえんをいし時、皆く、頭、身をもあつし
又陛下の唯、比、さうか、と申せんし、えん、外史と
その際、退いて、終、えん、陛下、の、神、皇、天、意、の
ゆ、秋、の、無、り、し、を、御、理、解、無、う、し、し、を、あ
く、る、こ、と、を、疑、ひ、し、を、詠、順、大、捷、の、時、又、こ
奏、上、る、及、ひ、し、を、その、時、も、えん、強、く、削、り、換、る、を
そ、う、ふ、と、仰、せ、えん、し、を、御、理、解、す、御、下、の、御、意、
ゆ、換、る、を、拜、し、外、史、を、初、め、て、陛下、の、御、意、
度、の、並、く、う、う、さ、る、こ、と、を、感、激、し、う、う、と、い、ふ

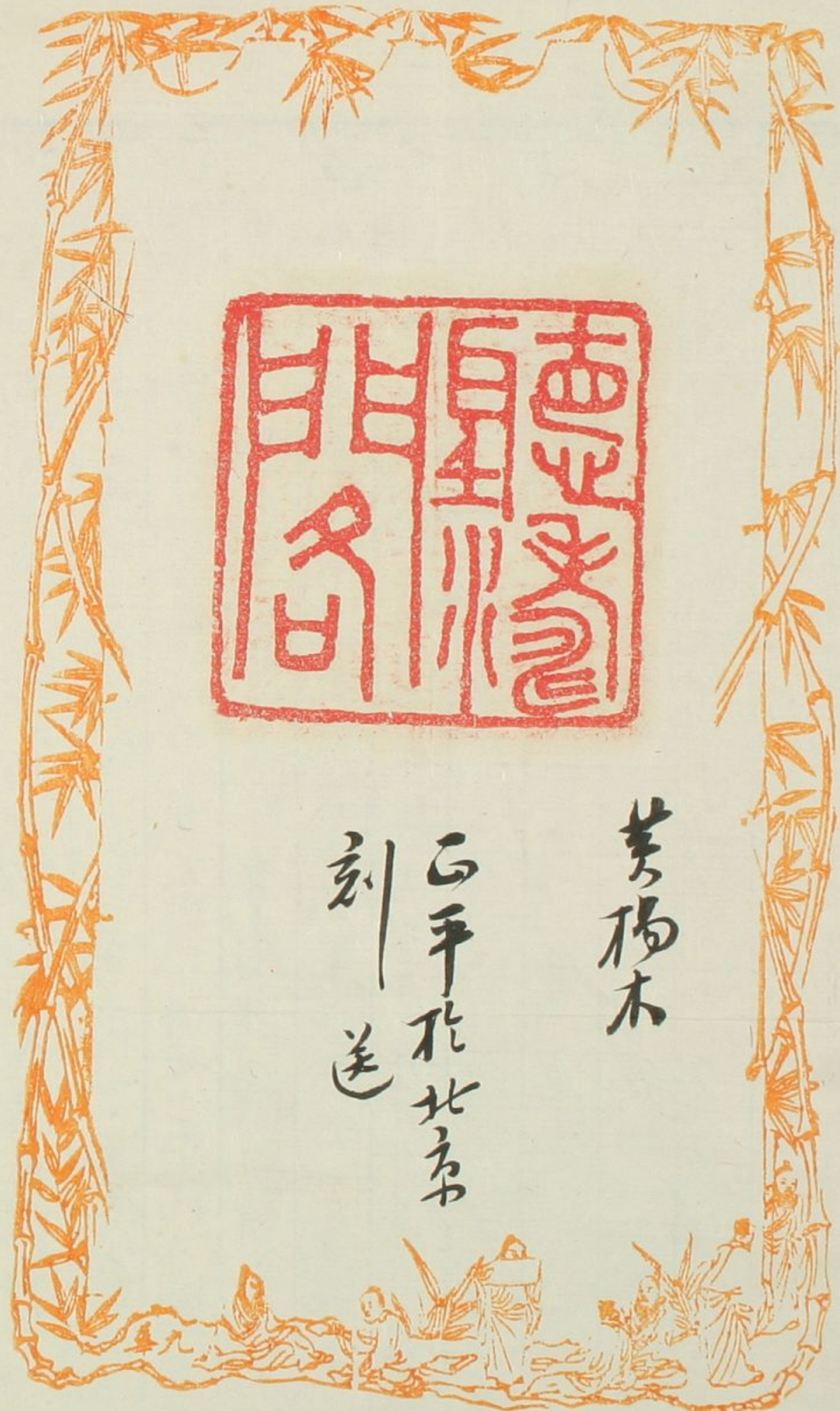
凡そ家後諸事此向日子約三十日、後記の史料
と考きつけおく。 五月甲子録

○五月廿五日大史料の才士面後諸事：掘えり
見、列名中、殊におもしろく感し、教正をた
目録を切りぬき掲ぐ多の考証も附し、
所也、底稿紙のゆゑ、後、お屋天竺の哀稿を
産まざる、極め長又、と書に、
十七八日ある、おき、
一、漢書の、
二、
推し、
と、

峯寺に花の、
（さき、
山、
尚、
江の、
寺、
不、
光、
り、
形、
あ、
こ、



正平於北京
刻送
芳楊木



芳楊木
正平於北京
刻送

東寺の万念文も是干の本と約と成りてあり、
 寛仁元年籍と約と成りてあり、
 夫者も是成りて是干と成りてあり、
 如し此の文の約と約と成りてあり、

八 大寶二年美濃筑前豊前三國戸籍斷簡

一卷 侯爵 蜂須賀正韶氏所藏

この三國の戸籍は 現存せる戸籍中、最古のものにして、既刊大日本古文书卷一收むるところの一部分なり、各紙背綴目に、「御野國加毛郡半布里太寶貳年戸籍」「筑前國島(志摩)郡川邊里太寶二年籍」「豊前國仲津郡丁里太寶二年籍」とあり、筑前豊前兩國には、各其國印を踏す、

九 延喜二年阿波國戸籍 一卷 同上

一〇 延喜八年周防國戸籍 一卷 近江 石山寺所藏

この戸籍は、前後缺逸し、紙背の綴目に、「阿波國板野郡田上郷延喜二年戸籍」と記せり、周防國印を踏せり。戸籍は諸國にて六年に一たび造る例にして、延喜八年は、延喜二年の造籍より恰も六年を経たり、以て當時猶其制度の正確に行はれたるを見るべし、紙背は金剛界入曼荼羅受三昧耶戒行儀の謄寫に用ひらる、

二 寛弘元年讃岐國戸籍 延喜式卷 一卷 公卿 九條道實氏所藏

讃岐國大内郡入野郷の戸籍にして、頭に「二保」「三保」等の文字を標記せるは、當時仍ほ五保の制の存せしを見るべし、平安時代の戸籍の現存せるもの甚稀に、延喜以後のもの世に知られざれば、本書の如きは、最も珍とするに足る、

三 律 斷 簡 延喜式卷 廿六紙背 同上

律は、もと十二卷ありしが、過半亡佚せり、この斷簡は、關訟律の一部分にして、從來缺本となりしものなり、

三 後漢書列傳廿一斷簡 同上

賈琮傳の下半、及陸康の傳にして、流布本と異同あり、世の字を代とし、民の字を人としたり、

一四 弘仁式斷簡 同上

弘仁式は、弘仁十一年の撰進にかゝり、四十卷ありしが、今悉く亡佚せり、この斷簡は、延喜の主稅式と對照し、且つ弘仁十四年に置きたる加賀の國名なく、天長元年大隅國に併せたる多嶺島を壹岐對馬の次に列記したるによりて、弘仁主稅式の一部なるを證すべし、

第四室

弘仁十一年の撰進にかゝり、四十卷ありしが、今悉く亡佚せり、この斷簡は、延喜の主稅式と對照し、且つ弘仁十四年に置きたる加賀の國名なく、天長元年大隅國に併せたる多嶺島を壹岐對馬の次に列記したるによりて、弘仁主稅式の一部なるを證すべし、

二七

吉田忠左衛門討入覺書

二通

同

上

この覺書は、討入に關する作戰計畫とも云ふべきものにて、先づ討入の箇所、各門に對する人數の配置を示し、ついで武裝、合言葉、武具等を述べ、最後に非常の手段として、晝討入の場合を規定せり、用意の周到見るべし、「山といへば里と答」などあるに、「山と川との合言葉」と云へる語句と雖も、全然根據なきにあらざるを示せり、本書は、書中山科云々を塗抹しあると、大石良雄鎌倉寓居豫定のことあるより考へて、元祿十五年二月十五日山科會議の結果、良雄の代理として、忠左衛門東下するに臨み、良雄と謀議決定せる草稿ならん、

たの文もとるべし、また、物をきり、はたし、

〇

三七

淺野長吉書狀

一幅

男爵

淺野守夫氏所藏

これ京都聚樂城にありし豊臣秀吉鍾愛の猫通走るを以て、その替として、淺野長吉より野々口五兵衛に依頼して、その飼養にかゝる虎毛猫を借受け、秀吉を慰めんとせるものにして、文祿二年のものならん。

四九

朝鮮僧松雲加藤清正に贈る書

一幅

男爵

神田乃武氏所藏

文祿二年、秀吉は小西行長及び石田三成等三奉行の提議に従ひ、明との和平條件を定め、關白豊臣

秀次をして之を執奏せしめ、勅裁を経たり、乃ち之を肥前名護屋に於て、明使沈惟敬に交付せしむ、この一通は、即その條件を記せる當時の案文なり、その條件は六ヶ條あり、曰く(一)明主の女を我天皇に上り、(二)勘合を復舊し、(三)彼我武官の臂紙を交換し、(四)朝鮮の内四道を收め、(五)朝鮮王子及び大官各一人を質とし、(六)擒とせし王子二人を歸還せしむと、この條件に就いて、行長等は沈惟敬と交渉する所ありしかども、惟敬等唯諂詐是れ事として、條件の旨趣は毫も明廷に達せざるのみならず、却て秀吉の明に贈る表文を偽作し、入貢封王を希望せりと稱す、明主即唯封王のみを諾し、秀吉を日本國王に封ず、秀吉赫怒、和議破裂して、慶長再度の役を起すに至れり、朝鮮江原道金剛山の僧松雲は策士にして口舌に巧なり、文祿役明軍の依囑により、我が軍の先鋒加藤清正の營に抵り、軍狀を探り、清正より提示せる我が和平條件を聴き、屢々交渉を重ねて之を反駁せり、ついで慶長の役起るや、清正また松雲と會して議する所あり、清正は我が軍征明の爲に路を朝鮮に借る、朝鮮は宜く先づ歸服すべし、我國先に生擒せる王子を放還せり、國王は親しく日本に來りて之を謝すべし、八道の内四道を割讓すべし等の條件を主張す、松雲は其不條理なるを論じ、十一ヶ條に分ちて之を駁す、この書即その抗辯を叙せるものにして、行長惟敬等が内外を欺罔せるの狀を述べて、朝鮮としての立場を明かにせり、

四四

倭寇圖 (舊題明仇十洲臺灣奏凱圖) 一卷

東京帝國大學所藏

この圖卷は、明代の人が、倭寇の慘害を記念せんが爲めに、畫かしめたるものならん、圖中一人の日本人が、鳥銃を手にするものを以て見れば、其嘉靖年間即ち我が室町末期の狀況を圖せるものなることを知るべし、明の兵士及び人民の服裝武器等は、概ね寫生なるべしと雖も、日本人のそれは、半は想像に成れるものゝ如し、史籍に徴すれば、當代の倭寇は、多く日明兩國人の聯合より成れるものなるが、この圖卷には其形跡絶えて無し、

○前冊の余り大隈宮殿のため人を引くべき方を
 と録せしが増の造の添加せるもの左の如し工
 4冊へス式割体を極めて簡易のもの遺送費約二五
 エリガへス新式割体建造、その左の程々の
 用供す

- 一 ありとの河あ割 年四回
- 二 家庭式兜章割 十の曜午後
- 三 章法様割 毎の曜午前
- 四 新心割及反魂割 年四回
- 五 日本式の割も利用するを得
- 六 章法及章法會 毎土曜

七 各地方の folk song or dance (各出奏)

八 昔言及伝説 帯一後

九 祝祭典 各紀念の 祝の 祭り

十 早稲へーチエント 年一四回大宮創立紀念の行ふ

- (1) 伝承りき (2) 方言
- (3) 神祇式及祭り
- (4) 先代生福集 神珍 (5) 早大紀念の口上
- (6) 邸宅平面詳細圖 (7) 庭園又雨園
- (8) 御座り様々玩具式の置物

校の文科と漢割は一漢字を二つくらゐ本意
するこゝと云ふ此の注を以て其義を生
か、^五千四の注を以て其利も惜あはざる
が、^金漢割の今方一般に漢解^{在得}と稱す
其意するを漢解と由のこゝに云ふこと
芝居興行をも人と引き木に錢を以て大
限分故を經營すといふを文化の意
義と漢割の本義とすまは決して差支を
人の増ふるべきを又く保守の徒と芝
居と卑賤の意と見做すべからず漢解
は今七おこり^八漢割と云ふを陰の意を以て
漢割に漢字を置き^九地と漢割に

文化上必要の漢字を二つと示すを所要と
有る、^{一〇}と云ふ法也

○^一坪内は是エリガベス朝の意を以て孰し
る、セーリスピアが初の漢割の意を以て
坪内と漢割の階上の廊下とし、此の
廊下左右の壁を以て廊下とおも
し、^二坪内は坪内の下に街路あり
一般人の街路を漢割の意を以て左衣の
右衣を以て漢割を見物し、^三坪内は
初め坪内と云ふ意を以て坪内と略す
之れを漢割の意とするなり、坪内は
坪内と云ふ意を以て坪内と略す

あやもやまの装飾きついつい米あやや大陸の
の演劇に應用せられてある状態より、但し西洋
へは日本の意匠や形式を採るゝ直ちに模倣
す、之れをセラライツシ、又、アレスレト
が、模倣の痕跡一寸見えず、日本の
装飾意匠を、モテフアリスと現地の
意匠を結合せしむることを物を交へる
尖出の如き保つて、固く今ある状態を改善
しつゝ、あやもやまの演劇に此傾向に、進
化して、あやもやまの演劇に、二三の回、
揮毫せしむる、之れを説く、来、
egorwan ^{モリス} The Theatre of Tomorrow

モリスの演劇論

や、あやもやまの装飾きついつい米あやや大陸の
の演劇に應用せられてある状態より、但し西洋
へは日本の意匠や形式を採るゝ直ちに模倣
す、之れをセラライツシ、又、アレスレト
が、模倣の痕跡一寸見えず、日本の
装飾意匠を、モテフアリスと現地の
意匠を結合せしむる、之れを説く、来、
egorwan ^{モリス} The Theatre of Tomorrow

古物之長し巻餘るる維新久しむる於てより一二の
敵あり考ふる事揚げ定む取えんとするは汲々然
此等々想ひ別れ八校規政定後の局面の多難に
して新法長の地位の危殆を感ぜざる能はず
五月八日春雨前の中録す
○所々閑に乘りて園をと漁り法帖二三巻を
一二を辨め

集古帖

六帖

家藏と一部あるも嘉祐損あり珍貴に
位を重し吾今次得たりとも嘉祐合さるる
装潢も可なり板七難ゆ也此帖日本
法帖の優るるもの選擇精を要

す、在りる本似物に出す

二王法帖

四帖

二王法帖は、その名目録釋文
の一帖と銘く、今得たりとも完璧
ありて装釘帖在る在也、阿波國
文庫の巻記あり、珍貴するもの選
す、此帖本を下々法に出す、

環魯堂法帖

一帖

此帖乾隆年官西林鄂珣の刻す
不之の許也、書梅道人の吳魏唐
沈石田祝枝山唐寅陳魯南文徵明
陳白陽孫允執陳仲醇、其畫者之董

傍くは石に其形：こゝとよ日物日形式も
 刻とんてある、こゝに高き石を高く高く常
 (義推)道出と這く摸造と一めれのを能
 此境内に寄進しこれにあり、燈籠の数は二十
 基を以て、其目たの如くあり

- 1 般若寺形 奈良般若寺文殊堂前には大塔
この寺に三つとあり
- 2 多武峯寺形 大和郡多武峯山神社に在り
延元二年の作世に寺燈籠と云ふ
東大寺法華堂前には建長六年
十月十五日の刻あり
- 3 元興寺形 大和郡元興寺あり
延元二年の作世に寺燈籠と云ふ
東大寺法華堂前には建長六年
十月十五日の刻あり
- 4 三井寺形 大和郡三井寺あり
延元二年の作世に寺燈籠と云ふ
東大寺法華堂前には建長六年
十月十五日の刻あり
- 5 葉山寺形 大和郡葉山寺あり
延元二年の作世に寺燈籠と云ふ
東大寺法華堂前には建長六年
十月十五日の刻あり
- 6 蟬丸形 大和郡蟬丸寺あり
延元二年の作世に寺燈籠と云ふ
東大寺法華堂前には建長六年
十月十五日の刻あり
- 7 燈明寺形 大和郡燈明寺あり
延元二年の作世に寺燈籠と云ふ
東大寺法華堂前には建長六年
十月十五日の刻あり

- 8 大秦形 葉山寺形と同じく奈良時代の心
佛の最古の石燈籠也
- 9 常麻形 中泊巨用基の大利南社寺にあり
足利義満の献納と云ふ
- 10 西之屋形 春日神社の境内に在り三層の一層は西の
屋の合前を以て云ふ也
- 11 平等院形 風風の形あり
- 12 法華寺形 奈良法華寺色院の庭にあり大徳二年
平式の佛像彫刻あり
- 13 八幡形 東大寺の佛堂平向山八幡宮にあり文治
二年僧房持奉納の銘あり
- 14 柚之木形 奈良表春日神社境内にあり聖徳天皇
伴延三年持奉納の銘あり
- 15 奥之院形 春日神社奥の院前にはあり中世に
十二支を刻り春日燈籠と云ふ
- 16 道明寺形 河内道明寺天満宮にあり康元年
刻の銘あり
- 17 元馬形 大和元馬の法興寺に在り
- 18 秋戸形 春日神社秋戸の初前にはあり
の寺燈籠といふ
- 19 蓮華寺形 洛北大原蓮華寺にあり

20 雲卜形

奈良春日神社に在り、延喜五年藤原の人
雲卜之を利する作と稱せらる

高橋常尾を奉致味うあると長く懐しの研究
を以て史に選擇し、書を得ては、工藤上の
参考とあるべきものがある。此の苦心や推付
考に七萬石を算して、誰れうを諍つた、
此の懐しの寄附し、いつき誰れおき、
へて寄附し、と、偶々見此の石枕を圓
し、一冊を算ら、受けて来た、即ち供養の
當日常尾の末の者、解つた、といふある、五月十
日録

○五月十日午後二時豫定にあり、早大の推
負合を測り、此人うも名を推考し、又

塩津新校規にて、徳吉とあることを解し、新
高田博士を以て、選ひ現る互選、
長に奉け、誰れおき、之れを認むるの合
せん、極め、重要なり、大隈侯と名を推考
推考するの件、異論あり、決する、高田
と推考し、推考の一、殿、列、山、山、英、
異論起り、其の要、高田の任期、一
年有、此を刺すの合、他人の代、
誤解をせし、易し、非、其の誤解、
田の晩節を傷ける、
べき時を、更任する、可と、
リ、山田の幼る、説を主張する、
の、採、給

撰の途の残堂に就し山田の顔を主しんとす
る唐彦と見え速き事なるも此後い
し何人か及駁せざる可らず余も出来ぬ心
口を禁し反高田との前柄をいふ。伊丹満彦
山田の夜を記しするも誰の七黙しなるの
か。余も高田の起るの止むを得る所
以を尋らば其の夜の賊攻の行状を記す書
を依つて説き、元を料理することあり難
る事なり。此の難向に高田をあらしむるは、私
とすも忍びていふ。其の夜の前余の起る所
私情を棄て、高田の起つを己をを得ず。為
す、賊攻の難向と日を晴らすんが、是に因難

を登し、山田のそのことと他の高田に記ししめ
んとすも高田を捉ふことありん。高田の
辭せんとすも、絶て留あるは、此難に向に南
九りとすも、因じ、若し高田の北面を切
りぬき得すとあつても、誰か其の地
場は、其を責あること能はざる。とすも、大
略余の主張こそ、余の露情をいふ所の
増田空田等文に、并する所あり、山田の例の
ことと、彼は執物に、目況を因持し、統向多
敷決に、依り決せん。其の瀬も出しか、是れを而
白うし、すと山田をあらざる所あり、山田の夜も
高田を記すとすも、不可とあらざる。又

注書細致しをを為するにまじらざるべし此の論をばけし
皆り成すしと口を論じ山の中結ぶ自今分のま
張を令成候に明記せんは清多分は漏れずと
漸やく折れ、爰に今令一政を以て其向を従長
とす言ふに清しは山田が令成候に目後を
録せよと云ふを燈檠殘迹に載すとの用意
と知るは、此席上右田の如きを燈檠の中し
如き前全あるものを成るは無く無傷に保たむ
し、其向を亮境に居んは犠牲に供すべしと
云ふ論論七出は山田をさしめん為める論
らんとも折る説きも七出はまじりて其の難
産を維ねるは山田の初めそのまじりて

田と就任の挨拶とと難局を常説とんは
と自今分の為めは合ふと云へり、此の一項前
録しは其の扱成政難の一項と併せ見こ
し

の如谷不例とと黄表紙三國昔話と漢蘭雜
話一冊を贈る余の近來河蘭地關係の回を
取扱ふことを聞てその如きと出づ、此を曼珠
鬼武の著るを挿画を北高き時方より可候
和三年の刊に傳ふ、唐人や阿拉伯人を殊ら
しうる時代のアテエにこそ其の著るの難局を
羅列しあり、内容と漢蘭二客日本の妓の言
を愛いんとエレキヤ磁石や望遠鏡やを用ひて

と仰り親心をわんとして又奴漢字の或を日暮
魚に跨り或を鳥に舞うを乞しと云ふ偶々又笑
を悔し皆を及感を買ひりつと云ふ黄表紙の
の脚もまた余黄表紙を好まざるも、んを一種
のおうゝ必あり、宜しく筆中より夏をへし、惜りく
此の末の方一枚落丁あり

○飯打常山の書帖をおち尋らむるも、今括動も
終三婚ふ、今方の筆中、條幅を飯あり、此画帖十二
枚の内八九枚人物を画す、人物殊々、風致あり、
常山常陸兼泥題本寺の注釋あり、願若世
に就て画を乞ふ、画風の似、似あり、一見、飯あり
り、又此の筆中を捉らむ、此画帖を乞ふ、一達、庶

を画す、然れ自家の心意氣を寫するに似
たり、常山俗稱貫一と云ふ 五月十二日録

今方、聲、價、重、書、景、本、莫、道、祇、河、世、景、
方、自、是、風、風、さ、上、衣、眼、高、翁、外、
黄、筆

○此の散葉画を漁り二三を得、皆珍画なり
されども、架中一葉、尚のよきなり

古様一巻 一冊

西村常文の書、所、余、前、年、不、好、し
けり、よ、い、つ、し、う、縁、久、た、り、今、得
たり、好、奇、本、也

山室清流 一冊

傳高島易士が、架り字本一部あり、
版本を得たりしと心うけ振りに幸に
獲たり、寛文改二

五月十四日記

○同去協会の創立三十年を越えし基本を三
十萬圓を募ると決し、余専ら畫策す而し
て終り思ふべく、基本を募るを不可多可とし
く、治民を為すに、全体一歩の歩みとして三十萬
圓を募るを難し、幾全ひ募り得らざるも
基本を募るに其利子を使い得る所、六人の利
子とすべしと募るに、四月三日、一ヶ年一萬八
千圓を募りし何んの多業を為し得べき、況し
て三十萬圓募り得るとすべし、或んと云ふ

是らざる程、或る治民を使い得るも、十萬圓
二十萬圓を募るも、容赦の多きを募らざれば
て、是らざるも、事業は何と云ふに、其
附者と満足せしむるを、得るを得ざる
ハ、ゆけし矣、僅々二三十萬の金を基本を
とす、如きことを、死する、其の事、今とす、
程、高島易士を、命つへし、其の事、
集の金を、余の、長に使用して、他、
お、ゆし、其の金を、得るの、地を、為す、若、
と、是れ、余の、主張し、偶々、岩崎家の、相、
高、科の、その、中、依、命、を、
所、も、余の、主張し、同、一、う、
、全体基本を

養集の本と廿日多く見らるるん名実と云ふに
迂闊なる者の為なり。実験せしめんハ行ひ難
きもの、腐る早稲田大そのに穀成基を以て
目を以て百番程成の基を敷次募集
以て其地實地に於てハ成る土地や建物や其地
の設備費に費し、成るに於ては、其地を
其地を以て得るを得るなり、其地を補完する
一口を田の醵金を募り、其の缺を補ふこと
を由義と云ふ。故乎、換言せんハ使用し得
べき利子の小額なる故に、其地を以て得
飽き、其地を以て得るを得るなり、其地を
之れに手と

附らば、賦税及乱るをその物産を生ず、以て
ゆ流大なるに於て内紛ありと云ふも、つまり其地を
流用を施し、其地を以て得るを得るなり、其地を
の今の境ありと未比多くの基金を募るるの
核運に利達せず、先許すても、其地を募らば
其地を使用し、其地の長を以て、其地を以て
其地を以て募るる核運を促すこと、其地を以て
桐田の法に近末岩崎三井の如き、高家と云
漸やく主法を以て、其地を以て、其地を以て
とあるハ、其の事其地の成ることを期し、徒ら
意義を以て、其地を以て、其地を以て、其地を
を以て、其地を以て、其地を以て、其地を

奮勵物成さくあんハ其土をまらしむる事
ニ要する資を皇位を得らるる也

○備後の西野村梅林の多うき前ニ梅あり今うち
木元延の遺存を三原志稱と署して先
流してつものり孰も名を西野村を三原の西
部と西野川の流る所也此川千五百歩あり
西野梅を三原の市と號す可と云ふこと此
梅村を三原の市と號す所と云ふ事
梅の流を流るるいと云ふ山陽のみやうといふ
人の題の多し是れ西野の題の引
をえり余郷以月浦梅是為海内無双及今
觀三原梅乃似其有也彼以幽室勝地則

平曠竹橋茅屋境有年所更しと書す若
者此の梅境と叙する文云々

前(思) 城の西より木あり村^{今西野の}
此の山あり其の梅の咲えりぬる
頃ハ白妙のるむハ雪の白くともあやま
句ハ大室をおほひ吹送るぬる凡の行末
はこと木も花のちうとばかりぬる入袖
りかこは梅のちう人成ちのくすむと
きぬこ又こんことを待のけんこといふ
紫あふ詠りいひつるへうとあふと
云々

○雜夢醒睡編(九冊)合二冊本多し或又と
収む所の萬曆刊する本善し公版二卷
末武聖傳一編を採す即武后淫行傳也
洛陽の美少年薛敖曹肉具確傳の形を以
て宛せり閨中の委曲を悉す如意君傳
と稱す淫曲と大同也吳也如斯と云ふを公
刊し七傳と云ふ亦一珠とす

本邦も七重保吹刊行の開卷一天と云ふを
此の醒睡編に収むる者と甚にお似たり俗間
の娛樂をうけて喜ぶことありあはれ又
云く本邦に在りし流し本々醒睡天と表題
しつものあり或も花を此編より取らう

○今世ハ一々玩具教行を贈る玉敷巻の
鈴を形皆賣り儀形あり金形あり素
葉に紫の附着をあらうしやあり寶珠
あり或は素大星あり素色の鈴あり何
も彩をも施し紫の丸と或は素大星を金
と塗ふ此等と云ふは改作の美江寺觀音
の祭礼を模して其の門前を賣るといふ此
祭礼は毎年旧曆正月十日を以て行
ふを例とし人争ふて之を購ひ養食を云
ふ家も此の玩具を柵の技に習し
之れを養食に揚げると時を風觸る
鳴る養食と其の勢を云ふ生育すと

の迷信あり、清めゆめりうらひの友」るも北院
具四五種を収め、中々魚形のものもあり、形
式大同心異し

五月十五日記

○五月十四日湯之田に乘し、飯倉の庄に行くと先
と併せて午後をゆく、翌年晩秋訪のち後初
めころ、まもなくころの間、代々木や高田の
馬場の停車場も改定せんと南目田の如くする
高田の馬場も飯倉の庄の庄の道路や橋梁
や堤防も修築をせし改善せしむ、村長の
執と漸々変し、曾て飯倉をまじし家
とカフエーヤ西洋料理の看板を掲ぐるを之
といふや、橋を掲げけし敷正井し、今所

ると今及大規模の建築、今更中より、
水神社の二階に、こゝ起ると、自分別荘の
隣地の小宮様もいつし、二階建の増築を
真々三〇元ぬ川の橋の款りき、流のさる也

五月十五日の録

○高村の宅と房らしたの二宅を得たり、此に稀款
の宅とあり、

五月十五日

一 黄龍公菊経四言歌解 三冊

此書大戸の支藩寺山、源頼寛若
す、本也、頼寛、但妹流の江りありし論
語、集集、説あり、人々之んを知ら、
菊を愛する事、こゝあり、自ら菊を栽

培し先諸あり或る説に差を以て道米の
以て幕府の徳を多けりと傳ふ
其の真否詳らざるも差の疑
此種味を耽りしこと推ふべし此書
ハ漢文体をも黄龍子曰を以て文の
冒頭を以て左法書を深極折衷し
一家言を以てなるもの也通編三十五
篇巻末表を以て圖す寶曆甲戌九月
若者の自序あり巻末に滿臣戸崎松
の跋あり又四字解を附し其の
滿臣自注あり此書を檢め稀
親のしあしめする家と云んせし

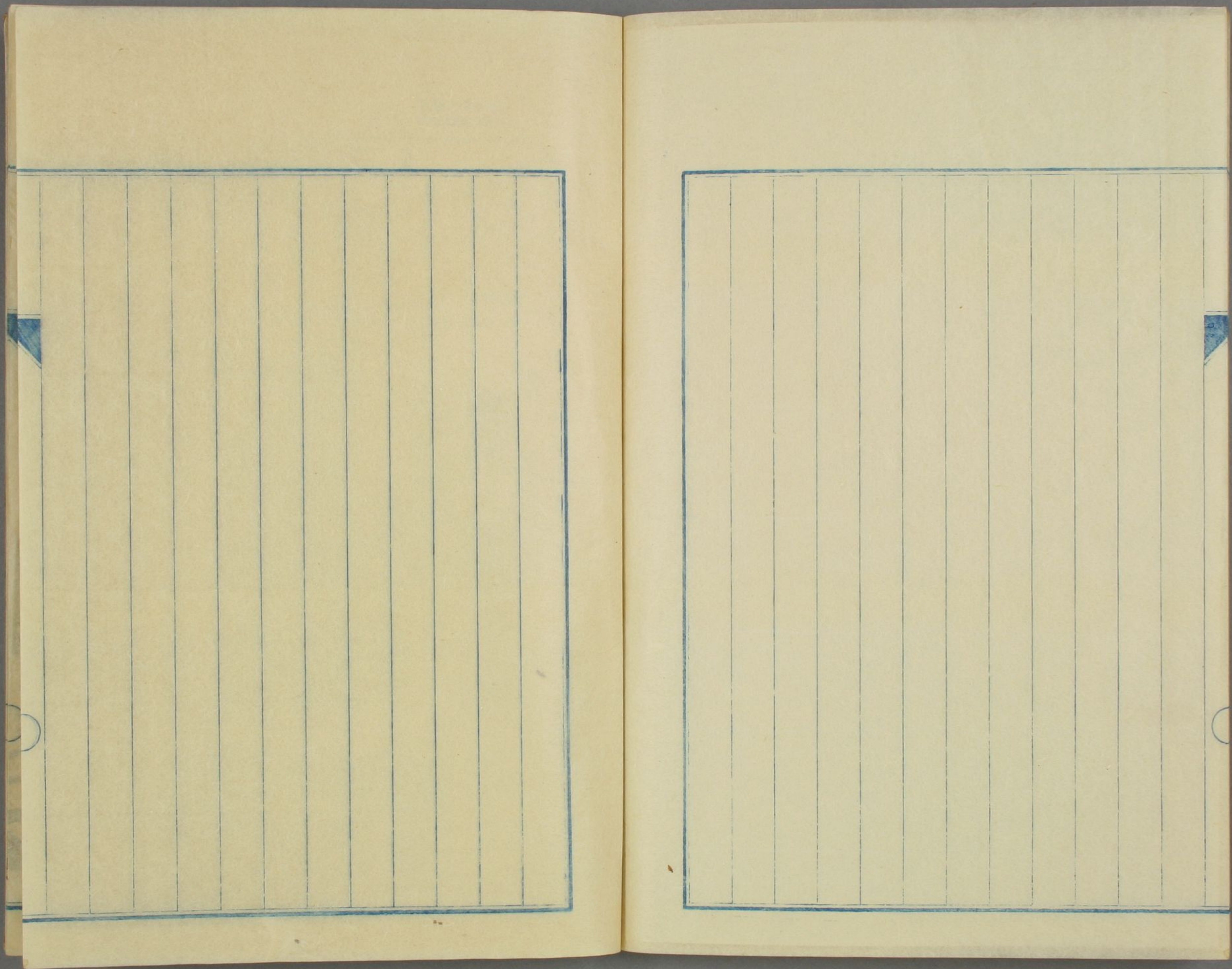
一中外錢史

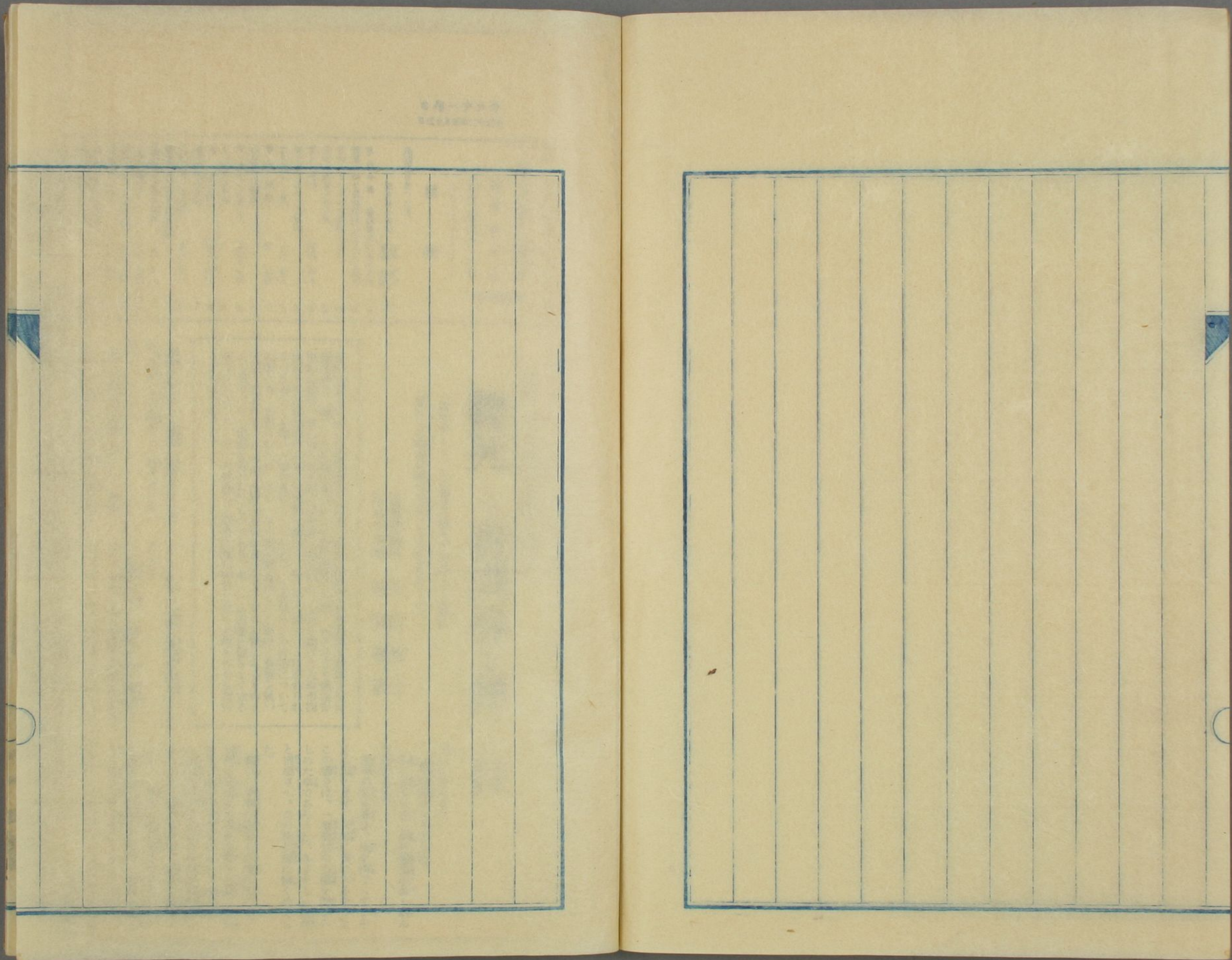
二冊

此書穂井田忠友の著す也中外泉貨
の考證甚に詳なり也目錄を見るに原
本五冊ありべきに似し此の流字本を
僅う二巻にまとむべし但し第一巻の
尾に土佐守権忠の跋ありを以て見
んハ五冊の内二冊の之上様とんし
似し、卷中往々古錢の圖を載め
れとも説の考證に便を爲めし
銀譜と此の錢譜とハ異なる流字
と四字字大として美濃版大本也天
保二年の跋あり土佐守権忠の跋

菊の栽培の著者云、鐵海の多くある
れを鐵史と稱せしめし、此も價四
円也

菊の材料を支那に取るとの多きは名花と稱
れを改し、培養の日本の流に於て是を和しと名
流石に美藝家の著る、鐵史外著の部を
削ぐに遺憾なく、中華とあると本邦を
さする、卷首金辨一、角金辨と重きを指
す、鐵史、重きを指す、著者の見識を認む





サンデー毎日

第二年 第二十一號
大正十二年五月十三日

行發曜日毎

目次

森訓導を葬つた日	三
四貫島小学校	三
私の今後 森訓導未亡人あきま	三
病氣治療と遺囑執行(今日の主張)	三
賢夫人としての大隈綾子刀目	三
宇治の新茶の出る頃	三
都市の銅像	三
春の會に流るゝ二傾向	三
並木道(の館)	三
春の花(國) 榎 貞雄	三
珍島個人民衆會	三
草作りに必要な土	三
サンデー目録室	三
畫 藍(自叙)	三
我が家庭の實情	三
牛乳における知識	三
農畜飼料を招來する尿毒症	三
藤原三子侯の衛生	三
長年の儲き方	三
脚本としての地盤加藤	三
明治産スケッチ	三
日本阿房宮(送新講談)	三
新流行の軍衣	三

引率した生徒の奇禍を悶えて

轢死した森訓導を葬つた日

吉田 新三
徳岡 晃敬

「森先生——」と六蔵寺の齋場で生徒代表が聲を
顔はした時涙に咽ばなかつたものがあらうか

受持児童を引率して修業旅行の途次、四名の生徒を阪神電車で自傷させた責任感と、傷ついた生徒の看護のため殆ど精神に異状を來すほどの懊悩を重ねた結果、遂に自らも又同じ又神線に飛び込んで自殺を遂げた大政市四貫島小学校森訓導の心事には理窟を離れて、全く無批判で、うけ容れられるべき美しくも深い人間の眞のこころがある。森訓導のこの行爲については既に多くが語られたが、次の一文は生前同訓導と同じ學校に教鞭を執つて最も親交のあつた、吉田、徳岡兩訓導が友人として又同じ職にあるものとして偽りのない感想を書かれたものである。道いた森訓導を最もよく知る者の手になつたこの一文は恐らく讀者の胸に理智を超えた何かを投げこまねばやむまい。

悲報を耳にして同僚と馳せつめたのは、五月一日の晩の十一時すぎであつた。西の宮東口停留場を降りて、森閑とした、うす暗い、家々の間を通り過ぎ、校舎に切つた森氏の家を訪ねた、

「森先生——」と六蔵寺の齋場で生徒代表が聲を顔はした時涙に咽ばなかつたものがあらうか

受持児童を引率して修業旅行の途次、四名の生徒を阪神電車で自傷させた責任感と、傷ついた生徒の看護のため殆ど精神に異状を來すほどの懊悩を重ねた結果、遂に自らも又同じ又神線に飛び込んで自殺を遂げた大政市四貫島小学校森訓導の心事には理窟を離れて、全く無批判で、うけ容れられるべき美しくも深い人間の眞のこころがある。森訓導のこの行爲については既に多くが語られたが、次の一文は生前同訓導と同じ學校に教鞭を執つて最も親交のあつた、吉田、徳岡兩訓導が友人として又同じ職にあるものとして偽りのない感想を書かれたものである。道いた森訓導を最もよく知る者の手になつたこの一文は恐らく讀者の胸に理智を超えた何かを投げこまねばやむまい。

悲報を耳にして同僚と馳せつめたのは、五月一日の晩の十一時すぎであつた。西の宮東口停留場を降りて、森閑とした、うす暗い、家々の間を通り過ぎ、校舎に切つた森氏の家を訪ねた、

「森先生——」と六蔵寺の齋場で生徒代表が聲を顔はした時涙に咽ばなかつたものがあらうか

受持児童を引率して修業旅行の途次、四名の生徒を阪神電車で自傷させた責任感と、傷ついた生徒の看護のため殆ど精神に異状を來すほどの懊悩を重ねた結果、遂に自らも又同じ又神線に飛び込んで自殺を遂げた大政市四貫島小学校森訓導の心事には理窟を離れて、全く無批判で、うけ容れられるべき美しくも深い人間の眞のこころがある。森訓導のこの行爲については既に多くが語られたが、次の一文は生前同訓導と同じ學校に教鞭を執つて最も親交のあつた、吉田、徳岡兩訓導が友人として又同じ職にあるものとして偽りのない感想を書かれたものである。道いた森訓導を最もよく知る者の手になつたこの一文は恐らく讀者の胸に理智を超えた何かを投げこまねばやむまい。

悲報を耳にして同僚と馳せつめたのは、五月一日の晩の十一時すぎであつた。西の宮東口停留場を降りて、森閑とした、うす暗い、家々の間を通り過ぎ、校舎に切つた森氏の家を訪ねた、

「森先生——」と六蔵寺の齋場で生徒代表が聲を顔はした時涙に咽ばなかつたものがあらうか

受持児童を引率して修業旅行の途次、四名の生徒を阪神電車で自傷させた責任感と、傷ついた生徒の看護のため殆ど精神に異状を來すほどの懊悩を重ねた結果、遂に自らも又同じ又神線に飛び込んで自殺を遂げた大政市四貫島小学校森訓導の心事には理窟を離れて、全く無批判で、うけ容れられるべき美しくも深い人間の眞のこころがある。森訓導のこの行爲については既に多くが語られたが、次の一文は生前同訓導と同じ學校に教鞭を執つて最も親交のあつた、吉田、徳岡兩訓導が友人として又同じ職にあるものとして偽りのない感想を書かれたものである。道いた森訓導を最もよく知る者の手になつたこの一文は恐らく讀者の胸に理智を超えた何かを投げこまねばやむまい。

悲報を耳にして同僚と馳せつめたのは、五月一日の晩の十一時すぎであつた。西の宮東口停留場を降りて、森閑とした、うす暗い、家々の間を通り過ぎ、校舎に切つた森氏の家を訪ねた、

「森先生——」と六蔵寺の齋場で生徒代表が聲を顔はした時涙に咽ばなかつたものがあらうか

受持児童を引率して修業旅行の途次、四名の生徒を阪神電車で自傷させた責任感と、傷ついた生徒の看護のため殆ど精神に異状を來すほどの懊悩を重ねた結果、遂に自らも又同じ又神線に飛び込んで自殺を遂げた大政市四貫島小学校森訓導の心事には理窟を離れて、全く無批判で、うけ容れられるべき美しくも深い人間の眞のこころがある。森訓導のこの行爲については既に多くが語られたが、次の一文は生前同訓導と同じ學校に教鞭を執つて最も親交のあつた、吉田、徳岡兩訓導が友人として又同じ職にあるものとして偽りのない感想を書かれたものである。道いた森訓導を最もよく知る者の手になつたこの一文は恐らく讀者の胸に理智を超えた何かを投げこまねばやむまい。

賢夫人としての大隈綾子刀自

旗本の血を受けて生れた刀自は
豪氣沈勇にしてよく夫君を助けた

【その七十四年の一生】

近世大隈重信侯の名が、近代政治史上に輝き、その背後に綾子刀自の援助が、大きい功となつて居ることを思ひ及ぶべきであらう。刀自は遊藝も好きで、一と通り習得せられた。かうして刀自は女として、將主夫婦としての優れた素質が培はれたのである。

刀自は旗本の血を受けて生れた

大正の聖代、安らかに逝かれた刀自は、七十四年前、深い眠りから醒めようとして、國內騒然、不安の聲に驚かれた。嘉永三年十月廿五日、甲斐源氏の流を擲み、當時五百石を食んだ旗本三枝家の長女として、江戸幕府の邸内、奥の座敷に生れた。一男一女を得て、いよいよ二子の誕生の前途を、呪はしくも二子の誕生と、幾何もなく世を去られた。たゞおあやは父の顔を知らぬ不孝な子であつたと兄弟が人に語られます。

祖母の慈愛と母堂の健氣に育つて

謙遜に於ける五百石の知行といへば、可なり豊かな生活が出来た。江戸直臣の五百石、まして太平を謳つた徳川の代も、未だ時勢の事として、本生活は物質上、思ひも及ばぬ。三枝家は、三枝家跡目相繼者守富氏が、まだ幼なかつたから、一家を構へる必要もなく、叔父君に當る小栗家に同居して、守富氏、綾子刀自二人の兄妹は、老ひたる祖母の慈愛と、健氣な母堂の手しほで、人と成りました。——小栗家といふは、講談によく出る小栗上野介又一の子孫で、代々この名を襲いで、その當時駿河縣に邸がありました。——母堂は刀自に對して、「女は何處へ嫁しても家政萬端

自分で手掛ねばならぬ」と、日常の心得は、心を籠めて仕込まれ、遊藝も教へられました。刀自は遊藝も好きで、一と通り習得せられた。かうして刀自は女として、將主夫婦としての優れた素質が培はれたのである。

一人住みの大隈家へ

月日は流れて、守富氏が廿歳の時、幕府に仕官して、下谷に二戸を構へ、下婢二人、僕一人を召使つてをられました。その後番町にも邸を移されました。その頃幕府の世の中にあつて、刀自は静かな家庭で少女時代を送られました。若い娘時代の刀自の眼に映じた周囲——新証——は、吹く風も殺氣立つた、江戸の邸でありました。王政復古と共に、三枝家は旗本なる上層へ進んで、田でも作らうかといふ相談中の事でありました。佐賀藩へ出入する商人の妻女から三枝家へも出入して居ましたので、當時先妻と別れて上京してゐた大隈重信侯が、夫人を探して居られるが、下婢年長の綾子嬢を嫁付けてはどうかといふ話を持ち出しました。併し兄君は、今の幕府に時めく役人の縁談に、出入商人の妻の話では頼りない、あまり耳も傾けず、母堂なども九州あたりの男と云へば、恐ろしいものであらう。そんな遠方の男へ嫁はさすとも、尻込みしてをられました。その後佐賀藩士の相良孝安といふ文部省(その頃文部省とは云はなかつたが)の書記官をしてゐた者より、正式の縁談があり、いよいよ話は進んで、明治二年二月、刀自は九歳の花の歳で、大隈大隈の夫人となられました。



御大典當時首相夫人として 大隈綾子刀自

の成功は、刀自の援助の功に依つて多かつたと云はれてをりますが、如何に賢明な刀自でありましたか、もし夫君が賢明な大隈侯でなかつたらば、單なる旗本の下力に終つたかも知れません。又大器を持たれた侯にして、刀自を得られなかつたらば、政界に於ける目撃ましい活動、殊に野に下つてからあれだけの名譽を博し、侯を凌ぐ事は、困難であつたらうと思つたのでございます。

夫人の大きな力は 若い時から

大隈重信侯は、幕府下に住んで居られたが、間もなく幕地に引退せられた。その頃有名な栗山浩と稱された時代でありました。山縣公義、上侯などが、國家に仕つて、壯年の元氣に委せ、不規則な生活をして居られた。夫人の大きな力は、若い時から、幕府下に住んで居られたが、間もなく幕地に引退せられた。その頃有名な栗山浩と稱された時代でありました。山縣公義、上侯などが、國家に仕つて、壯年の元氣に委せ、不規則な生活をして居られた。

刀自が最も苦しんだ 時代——財政的に

野に下つた侯は、その生命ともいふべき政治に就いて、決して居るは居られません。自由民権論を盛んに稱へ、改進黨を組織して、國運の興衰を待つて居られたが、侯を重々しく活動させる爲めには、刀自の苦勞が一過りではなかつたのです。在官中から特別に多かつた邸へは、源入された後と雖も以前に對し論客仕掛の経費がありませんでした。財政難を助すまいとして、大きい門戸を張つて行くには、家庭の女王であつた刀自が一人切腹されたのです。七十四年の生涯中、最も苦しんだのはこの時代でありました。刀自は、決して他人に弱身を示されませんでした。財政状態も、絶對に秘密にして、近親の人達でも、苦境を察しなかつた。その實際は知る事が出来なかつたのでした。

狼火の如く揚つた 條約改正の當時

第一次伊藤内閣が明治十八年に成立してから、外相井上侯の後を受けて、廿二年二月に、侯は外務大臣に任命され、再び政界の人となられました。歴代外相中、侯は外國人に譯號のよかつた大臣はないと云はれるのも、負け嫌ひの刀自の意向も手懸つて、侯の生活が他に眞似の出来ぬ經營者極め、外國人に對する態度が行届いてゐたからでした。刀自は性來美人の聞え高い人で、舞踏會にも度々その美しい容姿を現し、巧な接客振りを示されました。

はれます。二人の結合は、一人の世界的人物を作り上げ、我國政治史、教育史に大きな足跡を印しました。いづれに好むの運命の神が、幾千人中に只一つ與へた、完全な結婚であつたのでございます。

新証の元勳といはれる侯氏には、幕府の情史の緒はつてゐないのになら、程でしたが、大隈侯にはそれがありませんでした。刀自との結婚は、ロマンズで色づけようとする人があれば、それは強て想像を逞うしたに過ぎません。

た中に、侯侯のみは、いつも堂々と胸へて威儀を崩されなかつたのは、一意専心、夫に仕へて家政を掌られる刀自が控へて居られたからでした。友人と共に晋擧に上つて、進出の遊樂をされる時でも、非常に潔白に切り上げて他人の知らぬ間に、遊樂の時を渡されたのは、元來侯に遊樂的氣分がなかつたのでありませうが、或程度までは、夫人の大きな力が興つてゐたに相違ございません。

明治十四年に、侯が官職を退かれてから、刀自の變局には重い責任を負はされるやうになりました。現今でも侯侯の侯といへば、稱譽の仰ぐもので、下屋敷には好適なといふので手に入れられたのが、後年大學の敷地となり、繁華な學生街を作り出すに至りました。侯は如何なる大事業にも、刀自の意見を徴し、賛同を得てから活動されたので、表面こそ侯の力に成つたもので、その裏には、剛毅な刀自の強い決心と、陰鬱たる苦心が凝んでゐたのです。

侯も派手好きなら、刀自も侯以上に派手な事が好きでありましたが、大隈侯は侯に對して、刀自は弱めく、りやしない方でありました。つまり侯事に依り目なく、侯の體面を保つべき事の爲めには、大きい散財を惜みず、決して無意味に金を消費されはしなかつたのです。刀自はかくて、華やかな外相夫人として、愛ある目を送つて居られたが、時勢も條約改正の困難で、人心沸騰し、政府攻撃の聲は狼煙の如く揚がりました。



閱覽室

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--



